

令和5年度 奈良市立東登美ヶ丘こども園研究実践概要

園長名 辻 里香
全園児数 100名

1. 研究主題

見て 聞いて 感じる力を育てる
～心も体も弾ませよう～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

本園では子どもが主体的に活動し、豊かな心を育むことを目標に日々保育に取り組んでいる。子どもが主体的に活動するためには、子ども自らが安心した園生活の中で友達や保育者と信頼関係を築き、身近な環境に興味・関心をもち意欲的に物事にかかわるなど心も体も弾ませるような体験を積み重ねていくことが大切であると考え、その体験の中で見る力・聞く力・感じる力を育んでいきたいと願い主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

ひと・もの・こととのかかわりの中で、子どもの心や体が弾んだ体験をした時の、保育者の援助や環境構成を探る。

②研究の重点

- ・研究主題について職員間で共通理解をし、具体的な取り組みについて理解を深める。
- ・子どもが遊びや生活をする中で「見る力・聞く力・感じる力」が育つための保育者の援助や環境構成について考え、継続的に育ちを見ていく。

③活動の方法

- ・各クラスの事例を出し合い、子どもの心が弾んだ瞬間や、その時の保育者の援助や環境構成を探る。

子どもが心を弾ませるための援助や環境構成

子どもの心が弾んだ瞬間

<先生とダンス楽しい> 3歳児 6月

新しい環境に慣れるために安心できるものや場所を探し落ち着かない様子で廊下に出たり、走り回ったりし保育者の反応を楽しんでいたA児。ある日廊下で、鼻歌をA児が歌っていた。そのA児のメロディーを真似て保育者が歌ってみた。すると「先生も知っているの？」とA児は嬉しそうに微笑んだ。

次の日、A児が歌っていた鼻歌を保育室で流してみると、その音楽に合わせて、ジャンプをしたり手を振ったりして喜びながら音楽に合わせて動き始めた。近くにいたB児も「この歌好き」と保育者に嬉しそうに伝え、A児の横で飛び跳ねた。そこで十分に音楽に合わせて体を動かせるようゴム紐で場所を区切って遊ぶ場をつくった。保育者はA児と一緒にCDデッキを操作したり、好きな音楽を流して一緒に踊ったりすることを繰り返し楽しんだ。しばらくして、「先生とダンス楽しい」と恥ずかしそうにA児は話し、保育者と目を合わせ笑った。それからA児は保育者を誘ったり、B児と一緒にダンスをしたりすることを楽しんだ。その2人の様子や、楽しい音楽に誘われて、近くの友達も音楽に合わせて体を動かすことを楽しむようになった。



<考察>

- ・A 児の興味のあることや、呟きを遊びの環境に取り入れたことで楽しんで遊ぶ姿になった。また、自分のしたいことができる場所だと知ることによって安心感や保育者への信頼感に繋がり、心が動かされ、体も弾んで活動するようになると思う。

<スピノサウルスみたいになりたい>3 歳児 1 月

A 児と B 児は、手作りのしっぽを身につけているいろいろな恐竜になりきって毎日のように恐竜ごっこを楽しんでいる。突然 A 児が「あ！」と何かを思いついたような表情をしてどこかへ行き、洗濯バサミを両手いっぱいを持って戻ってきた。A 児は「先生、これを背中につけてスピノサウルスみたいにして」と保育者に洗濯バサミを手渡す。「どんな風につけたらいい？」と A 児に尋ねると、A 児は「スピノサウルスはこんなギザギザがついてるねん。これをいっぱいつけて」と保育者に説明し背中を向ける。保育者は A 児の背中側の服に洗濯バサミをつけながら「こんな感じがいい？バラバラにつける？まっすぐでいい？」と聞く。A 児「うんうん、そうそう、まっすぐ。しっぽにはつけないでね」とワクワクしながら保育者がつけ終わるのを待っている。保育者が「これでどうかな？」と言うと A 児は「ちょっと見てくる」と手洗い場の鏡の方へ走って行き、体をひねりながら自分の背中を見て「うわあ、本物のスピノサウルスみたいになった」とスキップで戻ってきた。保育者は「本当、ギザギザがかっこいいね。とっても強そう」と A 児に声をかける。その様子を見ていた B 児が「僕もスピノサウルスになりたいな」とつぶやく。それを聞いた A 児が「僕とおんなじみたいにしてあげる」と言って、洗濯バサミを両手いっぱいを持ってきて、B 児の背中につけていく。全部つけると A 児「はい、できた。おんなじみたいになった。見に行く？」と二人でスキップしながら鏡に向かう。B 児も体をひねりながら鏡で自分の背中を見ている。B 児は「おーかっこいい。本物みたい」と嬉しそうにする。保育者は「2 人ともかっこいい。本物のスピノサウルスみたいだね」と嬉しい気持ちを共感した。2 人は顔を見合わせて笑い、満足そうに歩き出し、また恐竜ごっこの続きを始めた。

<考察>

- ・洗濯バサミは、生き物や乗り物に見立てて遊んだり、転がし遊びで牛乳パックを繋げる時に挟んで留めることに使ったりと、使い慣れた用具であった。保育者が洗濯バサミの使い方こだわらず、A 児の発想を受け入れ一緒に面白さに共感したことで、A 児は満足感を得ることができ、B 児とも嬉しさや楽しさを共有することができたと思われる。子どものやってみようと思いをそのものを受け入れる保育者との信頼関係が、心を弾ませて遊ぶ子どもの姿に繋がると思われる。

<転がし遊び> 4 歳児 10 月

ドングリを使って転がし遊びをしていた A・B・C 児。A 児の「長いすべり台にして転がそうよ」という提案に「うん、そうしよう」と B 児、C 児も一緒にトイを運び繋ぎ始めた。いざ、ドングリを転がすとスタート地点から傾斜が緩やかだったため、ドングリが転がらずに途中で止まった。保育者が「ドングリ転がらないね。どうする？」と解決方法を考えられるように問いかけた。しばらくは A 児と B 児が手でトイを傾けて「ほら、転がるで」と転がしていたが、A 児が「すべり台はこんなんやった」と腕をななめにしてすべり台の角度を表現しながら保育者を見た。「そうだね。すべり台は A 君の腕みたいにななめだから、トイを置いておけるようにしたいね。何かいいのがあるかな」とビールケースがあるところに C 児と行くと C 児が「これいいかも」とビールケースをトイのところへ運んでいく。A 児も何かひらめいたように「C 君、それをここに置いて」とビールケースにトイを乗せて繋げた。C 児「よし、ドングリ転がしてみるよ！」、A 児「いいよ。やってみて！」B 児「先生はそこで見ててな」と言葉を交わし、C 児の転がしたドングリの転がる様子を 4 人で見た。スピードを上げて転がり、「やったー」「めっちゃ速い」と喜び合い、その後も何度も転がすことを楽しんだ。

<考察>

- ・ドングリがなぜ勢いよく転がらないかを保育者が子ども達に問いかけた。すべり台で遊んだ経験から傾斜の角度を思い出し、トイの角度を変えて転がすことを発見し、さらに遊びを楽しむことができたと思われる。

<マツボックリけん玉> 4歳児11月

秋の自然物に興味をもち、園庭で落ち葉を見つけたり、木の実を拾って遊んだりしている。見つけた自然物を転がしたり、ごちそうに飾ったりして遊ぶうちに「公園で拾ったから持ってきたよ」「これも使いたい」と家庭から自然物を持ってくる子どもが増え、自然物を使って遊ぶことを楽しんでいた。そこでより遊びが広がってほしいと思い、マツボックリと身近な素材で簡単につくることができるマツボックリけん玉を準備した。すると、「やってみよう」「家にもけん玉あるよ」「ゼリーのカップでもつくれそう」と興味をもち遊ぶ姿が見られた。「入った入った」「もう一回しよう」と何度も繰り返し遊ぶ中で、友達と見せ合ったり、どうしたら上手に入るか話したりしていた。「今日は15回も入った」「明日もしたい」と登園するとすぐに友達と誘い合って遊ぶようになった。自分なりに廃材を使ってつくる子どももいたので、一斉活動でマツボックリけん玉をつくることにした。それまで遊びに参加していなかった子どもも挑戦するようになり楽しんだ。「次は両手に持ってやってみよう」と集中して遊んだり、「こうやって手を動かしたら入りやすいよ」と友達に教えたりしていた。また、「どっちがたくさん入るか数えよう」と自分たちで遊びが楽しくなるように、アイデアを出し遊ぶ姿も見られた。



(考察)

- ・身近な素材や自然物を使うことで興味をもちやってみようとする姿につながった。そしてマツボックリけん玉が、難しすぎないことが子どもたちの挑戦する気持ちを高め何度も繰り返し継続して遊ぶようになったと思う。また、“できた!”と思う気持ちから友達と見せ合ったり、数を数えたりするようになり、子どもたちなりに簡単なルールを考えて遊びを進めるようになった。

<タオル綱引き> 5歳児 6月

今年度より、園内で「バランスボールで弾もう」という、ゲストティーチャーを招いての行事が始まった。その中で、骨盤が前や後ろ、横に歪んでいると、骨盤パンツがシワシワになり、話をしっかり聞けなかったりすぐに疲れて楽しく遊べなかったりするという話を聞き、椅子に座る時には姿勢を意識できるように「ピシッとパンツになっているかな?」と声かけをするようにした。声をかけた時は自分たちで姿勢を正し、話を聞いたり食事をしたりしていたが、しばらくすると姿勢が崩れることがあった。

体幹の弱さから姿勢が崩れると考え、楽しく体幹を育てる方法として、踏ん張ったり、引っ張ったりして全身を使って遊ぶタオル綱引きをすることにした。一対一でタオルの両端を引っ張り、床に引いた線を超えると勝ち。何度かトーナメント戦をしていると、必ず勝つA・B・C児がいた。姿勢を低くして踏ん張っている姿に気づくことができるように、さりげなく「A君やB君、Cちゃんは強いね。どうしてかな?」と呟いてみた。すると、「小さくなって(姿勢を低くして)るから」「足に力入ってるように見える」と気づいたことを話し始めた。そこで、タオルを引っ張る時にどこに力を入れているのか、どんな姿勢をしているのかを確認し、次のトーナメント戦で体を小さくして挑戦することにした。

今まで勝ったことがなかった子どもが、姿勢を低くすることで踏ん張る力が強くなり、勝つことができた。勝ったことを友達と一緒に喜び合い満足気であった。一生懸命タオルを引っ張っている友達を見て、大きな声で応援したり、勝った友達と一緒に喜んだり、負けた友達にも「めっちゃくちゃ頑張ってたよ」と励ましたりする姿もあった。勝った子どもも負けた子どもも「もう一回やりたい」と言って対戦相手を変えながら何度もタオル綱引きを楽しんだ。

<考察>

- ・タオル綱引きを通して、体を十分に動かす楽しさを感じながら、力加減、踏ん張る姿勢を知ることができた。
- ・保育者が声をかけたことによって、友達がどんな姿勢でタオルを引っ張っているか気づくことができ、自分もやってみようと思うことができた。

<縄跳びチャレンジ> 5歳児 2月

友達と誘い合って縄跳びを楽しんでいる姿から、縄跳びチャレンジカードをつくって遊ぶことにした。子ども達とどんな跳び方にするか、回数はどうかなどを話し合うと「さくら組のときは前跳び5回できたから10回にしよう」「お兄ちゃんがあや跳びしてる」と意見を出し合いながらチャレンジカードをつくった。また、項目をクリアするには、「友達に数えてもらうこと」「クリアすれば友達とシールを貼る」と、ルールを決めて取り組み始めた。子ども達がいつでも縄跳びチャレンジができるように、手に取りやすい所に貼り友達とカードを見合えるように透明のケースに入れておいた。次の日、A児とB児がさっそくカードをもって縄跳びをしていると、A児は数を数えてばかりで跳ぼうとしない。理由を尋ねると「うまくできないから」と悔しそうに話した。それを聞いたB児が「大丈夫だよ。一緒にしよう。やり方言うね」と手を取り一緒に跳び始めた。B児は「腕を伸ばしてゆっくり回すといいよ。やってみて」と話すとA児は恥ずかしそうにしながらも跳んでみる。A児の様子を見て「すごい。私もする」とB児も跳ぶ。失敗しても何度も挑戦している。保育者は二人を見守りながら、認める声をかけた。そして二人の姿をクラスみんなに話し、頑張っている姿を共有した。毎日続けているうちに「次はゆっくりやってみよう」「足を閉じて跳んだらできるかも」「もうすぐシール貼れるね。もう一回しよう」と、具体的な仕方を伝え合ったり励まし合ったり、思いを伝えたりして前跳びに挑戦していた。それを見ていた周りの子どもたちも「一緒にやりたい」「私も見て」と話しながら縄跳びチャレンジを楽しんだ。



(考察)

- ・共通の目的をもつ友達と一緒に挑戦することで心の支えとなり、あきらめずに続けることができた。また一緒に喜び合うことで達成感を感じることができた。
- ・友達との仲も深まり子ども達で遊びを進める時期である。そのため保育者は、見守る援助を心がけ、タイミングを見極めながら必要な言葉をかけるようにしたことで、遊びが継続したと感じる。また、周りの子ども達も二人の姿に共感し、クラスでも共有したことで、全体で縄跳びチャレンジに取り組み楽しんで挑戦することができたと思われる。

5. 研究の成果

- ・3歳児は、自分の思いを受け止めたり、共に楽しんだりする保育者との信頼関係の中で安心して思いを出せるようになっていく。「やってみたい」「もっとしたい」と思えるような用具や道具を準備し、繰り返しじっくりと遊べる環境や、思いを受け止める保育者の存在が、心を弾ませながら遊ぶ姿へとつながっていくことがわかった。
- ・4歳児は、子どもが興味をもっていることを遊びに取り入れたり発見や気づきを見逃さず、保育者も共感したりすることで子どもの遊びの意欲が高まった。また、子ども達の「やってみよう」とする思いが実現できるよう、子どもの興味や関心に合わせた環境構成が大切であると感じた。
- ・5歳児は、子どもが楽しめる運動遊びを継続して保育に取り組んできたことで、少しずつ聞く姿勢が保てるようになってきたと思われる。また、保育室の前に中庭があり、子ども達が「やってみたい」と思った時、すぐに挑戦できる環境であることが、体を動かして遊ぶ楽しさを感じたり、運動遊びへの意欲を高めたりすることにつながった。

6. 今後の課題

- ・「やってみたい」「もっとしたい」という気持ちや、子どもの好奇心、探求心を育む保育者の援助や環境構成を引き続き探っていきたい。
- ・体の不器用さや姿勢保持が苦手な子もいるため、クラスの実態に合わせ身体を使った遊びを取り入れ、体の使い方や体力の向上を目指し、主体的に活動する子どもを育てていきたい。